

聖職候補生 福永 澄

昨年4月以来、主日の実習として東京聖三一教会さんにお邪魔してまいりましたが、私の東京聖三一教会での実習も、本日と次の主日をもって終わることとなりました。このコロナ禍にあって、思うように皆さんのお一人ひとりと交わりの時をもつことができなかつたことは残念に思いますが、皆様のお祈りとお支えのうちに、この実習の時を過ごせたことを感謝しております。また、本日は復活節の第五主日に続いて聖餐式の中でお話しをさせていただく機会を与えていただきましたこと、菅原司祭をはじめ、東京聖三一教会の皆さまに感謝いたします。

聖霊降臨後第5主日に、私たちに与えられた福音書には「善いサマリア人」という見出しが付けられていて、クリスチャンの方々にとっては馴染みの深い有名なお話です。幼児洗礼の恵みに与り、ミッションスクールで育った私にとっては、馴染みが深いと言うよりも、耳にタコができるほど、礼拝での説教や聖書の授業で聞く機会の多かつたお話です。小学校時代には「善いサマリア人」と聞くと、「困っている人を見かけたら助けてあげるお話だよな!」というようにクラスみんなが理解していたことを思い出します。勿論、このお話は、「困っている人を見過ごしにせず、助ける」ことへの勧めとしての意味もあると理解できるのですが、今回の福音書全体は「隣人とは誰のことか」ということがテーマになっているようです。

律法の専門家はイエス様を試そうとして質問を投げかけています。「何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか(25節)」というもので、彼はすでにその答えを知っていて、わざとイエス様に質問しているのです。その答えとは、「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。(27節)」というものです。これは、聖書の全内容を「神への愛と隣人への愛」という2点に要約した模範解答です。イエス様も「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば、命が得られる。」と言われました。しかし、イエス様のこの言葉は律法学者にとって、実に不愉快な、痛いところを突かれた言葉でした。なぜなら、彼にとって聖書の知識は誰にも引けを取らないほど豊かなものでしたが、聖書のみ言葉を知っていることと、聖書のみ言葉を実行することとは別のことであつたからです。

さらに律法の専門家は自分を正当化しようとして、イエス様に質問しています。「わたしの隣人とはだれですか(29節)」という質問です。これについても律法の専門家の頭の中には答えがあつたのではないかと思うのです。すなわち、彼にとっての隣人とは「私のように律法を大切にし、律法に従って生活をしている罪のない正しい人」なのだと考えていたのではないのでしょうか。愛する対象を自分の好む人に限定するならば、愛することは簡単なことです。律法を大切にし、律法に従って生きることは悪いことではないでしょうが、イエス様のお答えは律法の専門家の想像をは

るかに超えたものでした。それが今回の福音書に記されている「善いサマリア人」の喩えです。

ところで、そもそもサマリア人とはどのような人々でしょうか。サマリア人とは、旧約聖書の列王記下によると紀元前721年、北のイスラエル王国がアッシリアによって滅ぼされた際、住民は捕囚の民となり指導的地位にあった高位者は強制移民により他の土地に移され、サマリアにはアッシリアからの移民が移り住むようになりました。このとき旧イスラエル王国領の残留イスラエル人と、移民との間に生まれた人々がサマリア人と呼ばれるようになったのだそうです。一般のユダヤ人はサマリア人を混血ゆえに軽蔑、差別し、付き合わず、旅行する時もサマリア人の住む土地を避けて行きました。このような民族間の憎悪、差別の感情を背景に、このたとえ話が成り立っています。

律法の専門家にとっては、自分たちこそが清く正しい人なのであり、国の滅亡によって他国の支配下にあり異文化の影響を受けた人々（サマリア人）は、もはやユダヤ人と呼ぶには相応しくない人々だと考えていたようです。そうした生粋のユダヤ人と呼ぶに相応しくない人々の事を自分たちとは異なるものとして見下げ、軽蔑していたようです。律法の専門家にしてみれば最も軽蔑すべき人々であるサマリア人が「隣人」であるという、到底受け入れることのできない物語が突きつけられたのです。軽蔑している、愛するに値しないサマリア人が「追いはぎにあった人の隣人」だというイエス様の言葉に触れ、とまどった事でしょう。

ここで、「善いサマリア人」に登場する人物を見つめ直すことで、福音書のメッセージを掘り下げてみたいと思います。物語に登場するのは4人です。旅の途中で追い剥ぎにあい、身ぐるみを剥がされた上に殴られて半殺しになってしまった人については福音書に書かれていませんが、なんとも不幸な出来事に見舞われてしまった人です。この傷ついた人に遭遇するのが、祭司、レビ人、サマリア人の3人というわけです。祭司とレビ人は「その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った（31・32節）」とあります。この記述だけを読む限りにおいて祭司とレビ人は見て見ぬ振りをして傷ついた人を置き去りにしたように感じられますが、祭司やレビ人にとっては、人命救助よりも神殿に仕えるという仕事の方が優先されるという考え方があったのでしょうか。また、祭礼にかかわる人物には「死体に触れてはならない」という禁忌があり、被害者がもし死んでいたならば、禁忌に反することを恐れたために「道の向こう側を歩いて行った」という理解もできそうです。つまり、祭司やレビ人には傷ついた人を見過ごしにせざるを得ない職業的な事情があったということです。福音書の書かれた当時の人々にとっては、神殿に仕える人々の職業的な事情は周知の事実であった可能性があります。そうすると、祭司やレビ人は悪くないということなのではないでしょうか...少なくとも、祭司やレビ人には自己を正当化するに十分な理由があったと言えそうです。

ここで、もう一人の登場人物であるサマリア人を見てみましょう。このサマリア人も旅の途中でありました。その様子が「費用がもっとかかったら、帰りがけに払います」という言葉から分か

ります。どんな人でもそうですが、大抵の場合、旅にはスケジュールや予算があります。現代のように交通機関の発達していない時代であって、旅には苦労も多かったことと思います。何かのアクシデントに関わって出発時間が遅れたりすれば、現代ならば「次の電車にしよう」と気軽に思えたでしょうが、当時は夜の移動は危険が伴うなど配慮しなければならない問題も多くあり、場合によっては一泊追加しなければならないといった事態も起こり得たでしょう。一泊増えれば、その分費用もかさみます。このサマリア人も同様だったはずですが、それでも彼は「その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した(34節)」のです。見知らぬ人を助けるために労力を使い、貴重なお金も出すのは、大変なリスクを伴う行為だった事でしょう。しかし、自分のことを考えたら人を愛せなくなってしまうのです。自分のことを最優先にしないで、その人のことを真剣に考えることができるということが本当の愛という事なのでしょう。

さて、「隣人とは誰なのか」が分かってきたわけですが、問題はここから先です。福音書に登場する律法の専門家ではありませんが、分かっている行動が伴わなければ意味がないのです。町の中にいますと、ベビーカーを押しながら階段を上がれずに困っているお母さんがいます。また、重い荷物を持って辛そうに歩かれるご高齢の方をお見かけします。さらには、熱帯夜に公園のベンチで寝ている住むところのない人など、様々な苦労や困難の中にある人に遭遇します。私は、彼らの「隣人」として生きているのだろうかと思問する時、自信をもって「私は彼らの隣人です」と言えません。駅の階段でベビーカーを上げようと苦労しているお母さんを見かければ声をかけるようにしています。電車で座っている時に、ご老人が立っていらっしゃれば席を譲るようにしています。しかし、必ず、いつでもそのようにしているかと問われれば、そうでない時があることを否定できません。恥ずかしいのですが、「今日は急いでいるから」「今日はクタクタに疲れているから...」と自分に言い訳をしてしまうこともある、という自分の現実に目をつむることはできないでしょう。もしくは、最近のこのご時世では、声をかける事で不審者だと思われたらどうしよう、と逡巡してしまうこともあります。

また、自然災害などで被災された方々に思いを致しながら、被災地には行かず、「募金をしたからいいだろう...」と、のうのうと東京で暮らしている自分がいます。これでは「隣人」には程遠く、祭司やレビ人、質問をした律法の専門家と何ら変わらないのかもしれませんが、ポイントは「知っていることではなく実行しているか否か」です。

イエス様は「隣人を自分のように愛しなさい」と仰っています。私たちは、そもそも自分をちゃんと愛しているのでしょうか。「今日は急いでいるから」「今日はクタクタに疲れているから...」というのは自分を愛しているのではなく、単なる自己本位(エゴ)です。自分の都合を愛しているに過ぎないでしょう。自分を愛するというのは、神様から与えられた命を喜んで感謝し、自分

に与えられた賜物を見極め、その賜物で使命を果たして生きていくということではないでしょうか。

正しい行いをわかっていながら、自分の都合で実行したり、しなかったり、という現実を認めなければならないでしょう。しかしながら、正しい行いを徹底できない自分を認めつつも、主に喜ばれることを願い求め続けていくように私たちは招かれ続けているのだと思うのです。

イエス様はこのたとえ話の中で、私たちを低く、倒れ、傷つき、苦しんでいる者の側に置いて問いかけています。「一体だれが、このように苦しみのうちにあるあなたに近づき、あなたを心から愛した人なのですか」と、そのように問いかけておられるのです。私たちは自分自身が本当に苦しむ者の側に立つことなくしては、苦しむ者を愛することができないのではないのでしょうか。愛とは苦しみを共に担うことです。愛とは決して観念的なものでも、抽象的なものではなく、具体的な人間としての出会いを通して生まれてくるものなのでしょう。

イエス様の十字架に見られる愛の姿には、神様への全幅の信頼と、真に自分を投げ捨て、自分を否定することによる隣人への愛が交差し合っています。イエス様の十字架の苦しみと死は、わたしたちの苦しみ、悩み、重い罪を背負ってくださることであり、血の滴るような現実の苦しみがそこにあります。イエス様は「行って、あなたも同じようにしなさい。」と、わたしたちを苦しみの真ただ中へと押し出していくお方でもあります。

わたしたちが目をそむけ、避けて通りたい誘惑にかられる時、あえてその現実の中へ「行って、あなたも同じようにしなさい。」と、呼びかけられるのです。あの善いサマリア人と同じように、苦しみ、悩みの中にある人の側に立ち、それを共に負いなさい。「あなたはそれを一人で負うのではありません。わたしもそこに一緒にいます。」そう呼びかけておられるお方の声を、この善いサマリア人の話の中から聴き取りたいと思うのです。まずは、「隣人」として生きていない自分を謙虚に見つめるところから始めたいと思います。そして、イエス様が「行って、あなたも同じようにしなさい」と招いていらっしゃるのですから、生かされていることを喜んで感謝し、心から自分を愛した上で、他者へ愛を向けられる者として歩んでいけるように、主に喜ばれる生き方を願い求めていきたいものです。